

過嶺二首其二

嶺を過ぐ

蘇軾

元符三年（一一〇一）六十五歳 十二月、北歸の途上、大庾嶺を過つて作る。

1 七年來往我何堪

七年來往 我れ何ぞ堪えん

2 又試曹溪一勺甘

又試む 曹溪 一勺の甘きを

3 夢里似曾遷海外

夢里 曾て 海外に遷るに似たり

4 醉中不覺到江南

醉中 覺えず 江南に到る

5 波生濯足鳴空澗

波は 濯足に生じて 空澗に鳴り

6 霧繞征衣滴翠嵐

霧は 征衣を繞つて 翠嵐を滴らす

7 誰遣山雞忽驚起

誰か 山雞をして忽ち驚起せ遣む

8 半巖花雨落毳毼

半巖の 花雨 落ちて 毳毼

【語釈】●七年：紹聖元年（一一〇九四）九月、惠州への旅でここを通る。それから七年め。●曹溪：中国禅宗の六祖慧能が住した地名（現・広東省韶関市）●一勺：勺はさじ。ほんのひとすくい。●海外：海南島をいう。海南島での逸話と詩を集めた蘇文忠公海外集がある。●濯足：遠い旅から帰って洗う足。●空澗：澗は谷川。●翠嵐：嵐は山気。●征衣：たびごろも。●山雞：やまどり。南方に産する、雉の類。鏡を見せると己が姿に対して美を誇つて舞い、死ぬまでやめないといい。蘇軾に「山雞舞ひ破る半巖の雲」の句もある。●半巖：がけの半ば。●毳毼：毛の長いさま。細く長く垂れるさま。

【解釈】七年前に越えたこの嶺を（はからずも北へ帰ることになって）今日また越える。わたくしの心は感にたえがたいものがある。このたびもまた曹溪の水をひとすくい汲みとつてその味をこころみたまものである。

海外に流されていたあいだのことは、今ではさながら夢であったにおもえ、このふんではおそらく酔い心地でまるで気づかぬままに江南にかえりついでいることである。

旅に疲れた足を溪流に洗えば、波は人けのない谷間にさわぎ たびごろもにまとい つく霧は、みどりの山気をしたたらせる。何に驚いたのか、やまどりが急にパツと舞い上がった。それにつれて崖に咲く花がはらはらと花びらの雨をふりそそいでくる。

漢詩大系 近藤光男より抄出